研究ノート

日本大学生産工学部研究報告A
2019年 6 月 第52巻 第 1 号

アンコール古代遺跡の浮彫に描かれたゴングに関する一考察

塩川博義*

Consideration of Gongs Carved in Reliefs of Ancient Angkor Remains

*Hiroyoshi SHIOKAWA**

Bronze percussion instruments are widely distributed in Southeast Asia. Especially in Java and Bali, Indonesia, bronze gongs are used for Gamelan music as important musical instruments. Bronze drums made before A. D. were discovered in China and Vietnam; therefore it is easy to assume that bronze percussion instruments were introduced to Indonesia from Indochina over a long period of time. However, it is not clearly known what was introduced and when and how it was introduced. Furthermore, the origin of bossed gongs currently used for Gamelan in Indonesia as important musical instruments as well as when they were made is not clearly known.

The author is currently working on a study with a theme of "Changes of Balinese Gamelan in Indonesia by acoustical analysis." Examining the origin and changes of bronze percussion instruments in Southeast Asia is important when discussing on the change of Gamelan.

In this study, gongs carved in reliefs of Baphuon, Angkor Wat, and Bayon as ancient Angkor remains in Cambodia were investigated and changes of gongs from the 11th Century to 16th Century were examined, resulting in the following two findings.

1. Flat gongs already existed in the mid 11th Century, and were almost all described as a single unit as musical instruments banged to raise morale along with the army's march until the early 13th Century.
2. Reliefs of bossed gongs did not appear until the early 13th Century, while they appear with musical instruments that play other melodies in reliefs on the east side of the north walls on the 1st level of Angkor Wat created in the mid 16th Century. Therefore, it is considered that bossed gongs began to be played along with development of music with melody in Cambodia for approximately 300 years from the mid 13th Century to the mid 16th Century.

Keywords: Bossed Gong, Flat Gong, Relief, Angkor Remain

1．序論

東南アジアには，青銅製の打楽器が広く分布している。特にインドネシアのジャワ島やバリ島では，青銅製ゴング（銅鑼）が重要な楽器としてガムラン音楽で使用されている。中国やベトナムで紀元前に製作された青銅製の銅鼓が発見されているので，青銅製打楽器は，インドシナから長い年月を経て，インドネシアへ伝わったものと考えることは容易に推測できるが，いつ頃，何が伝わったのかは，はっきりとはわからない。また，現在，インドネシアのガムランで重要な楽器として使われるコ

*日本大学生産工学部建築工学科

ブ付のゴングは，いつ頃どこで最初に製作されたのかはっきりとは分からない。

8世紀末から9世紀半ばにかけて建造されたインドネシアのジャワ島にあるボロブドゥール遺跡には楽器の浮彫がいくつか描かれているが，金属製打楽器は小型シンバルや鈴だけでゴングは描かれていない[1)]。また，日本のお茶会で使われるコブ付の銅鑼は，安土桃山時代（16世紀末から17世紀初め）にインドネシアのジャワ島から伝わったとされている[2)]。

現在，著者は「音響解析を用いたインドネシア・バリ島のガムランの変遷」というテーマで研究を行っている。これら東南アジアの金属製打楽器の起源や変遷を調べることは，ガムランの変遷を論じる上でも重要な事柄である。

カンボジアにあるアンコール遺跡の浮彫には多くの楽器が描かれており，今回，訪れて調査することができた。そこで本報では，アンコール遺跡の浮彫に描かれた金属打楽器を取り上げて，ゴングの変遷について考察する。

2．アンコール遺跡におけるゴングの浮彫に関する先行研究

アンコール遺跡に描かれる浮彫や碑文に関する研究はカンボジアを植民地として統治していたフランスの調査研究や石澤らの研究[3)]など数多くあるが，描かれている，あるいは書かれている内容や美術様式に関するものが多く，ゴングに関するものは少ない。Roger Blench は，アンコール遺跡に描かれている楽器を紹介する論文[4)]を書いているが，数ある楽器の内でゴングをひとつ取り上げているだけである。黒沢は楽器大辞典における楽器の紹介の中で，アンコール・ワットの浮彫[5)]を一部取り上げているが，特に，ゴングの変遷を考察しているわけではない。本報では，アンコール遺跡のバプーオン寺院，アンコール・ワット寺院，そして，バイヨン寺院の3寺院におけるゴングと思われる壁面浮彫を調査して比較検討する。

3．調査対象のクメール遺跡

3.1　バプーオン寺院

バプーオン（Baphuon）寺院は，アンコール・トム（Ankor Thom）遺跡群内にある王宮とバイヨン寺院の間にある。ウダヤーディティヤヴァルマン2世が1060年頃に建立したと言われているヒンドゥ教（シヴァ派）寺院である。

3.2　アンコール・ワット寺院第一回廊

アンコール・ワット（Ankor Wat）は，スールヤヴァルマン2世が1113年から1150年頃に建立したと言われているヒンドゥ教（ヴィシュヌ派）寺院であり，第一回廊の壁面に多くの楽器が薄肉浮彫で描かれている。

西壁面南側浮彫には，古代インドの大叙事詩「マハーバーラタ」のクライマックスの戦闘場面が描かれている。また，西壁面北側浮彫には，もうひとつの古代インドの大叙事詩「ラーマーヤナ」の場面が描かれており，特にランカー島の大戦闘場面が描かれている。南壁面西側は，王座に座るスールヤヴァルマン2世が描かれている「歴史回廊」と言われている浮彫である。また，南壁面東側浮彫には，「天国と地獄」が描かれている。東壁面南側浮彫には「乳海攪拌」が描かれている。

1546年から1564年の間に未完成であった第一回廊東壁面北側および北壁面に，アン・チャン1世が薄肉浮彫を刻ませている[3)]。その東壁面北側浮彫には，「ヴィシュヌ神と阿修羅の戦い」が描かれている。また，北壁面東側浮彫には，クリシュナとバーナ（阿修羅）の戦い，北壁面西側浮彫には，アムリタをめぐる神々と阿修羅の戦いが描かれている。

3.3　バイヨン寺院

バイヨン（Bayon）寺院は1181年から1218年まで在位したジャヤヴァルマン7世によって建造され，13世紀初めに完成された。描かれている内容は，第一回廊では，チャンパ軍とクメール軍の戦闘場面とそれを支えた庶民の日常的な生活や貴族の暮らしが多数盛り込まれている。第二回廊では，乳海攪拌などのヒンドゥ教の神々の世界や当時の宮廷内の様子が描かれている。いずれも，アンコール・ワットと同様に，薄肉浮彫である。

4．青銅製打楽器

4.1　ゴング（銅鑼）

ゴング（gong）は英語としても通用するが，本来インドネシアのジャワ島やバリ島の言葉であり，日本では銅鑼のことである。インドネシアでは，低いゴンという音を出す大型のコブ付銅鑼のことをゴング（**Fig. 1**）と呼ぶが，黒沢は，大小の区別なく，板金を槌で打つ種類をゴングとして6種類のゴング様式に分類している[5)]。本報では，その分類様式で第2類盆形式のコブがないゴングをフラット・ゴングとし，第4類瘤形式コブ付ゴングをコブ付ゴングとする（**Fig. 2**）。

コブ付ゴングの桴は，高次倍音を抑え，音高をはっきりさせるために，先に布を巻き，丸く団子状にしているものが多い（**Fig. 3**）。

4.2　銅鼓

銅鼓を **Fig. 4** に示す。中国から東南アジアで広い範

Fig. 1　Balinese Gong

Fig. 2　Flat Gong and Bossed Gong

Fig. 3　Stick of Balinese Gong

Fig. 4　Bronze Drum（Phnom Pen Museum: B. C.2～3）

囲に分布しており，古いものは，紀元前に製作されたものが発見されている。側面に担ぐための棒を差し込む部分あるいは紐を通す部分が作られている。ゴング様式に分類すれば，コブがないフラット・ゴングに分類される。

4.3　コン・ウォン（Kong Vong）

小さなコブ付ゴングを並べ，旋律を演奏するカンボジアの楽器，コン・ウォン（Kong Vong）を **Fig. 5** に示す。ゴング様式として，コブ付ゴングに分類される。

Fig. 5　Kong Vong

5．調査結果

5.1　バプーオン寺院

Fig. 6 にバプーオン寺院の壁面浮彫を示す。これによれば，浮彫は深く，内側にいくにしたがって，小さくなるのでゴングであると推察され，表面にはコブが描かれていないので，フラット・ゴングと考えられる。ゴングを棒に吊って二人で肩に担ぎ，歩きながら後ろの人が左手でゴングを固定し，右手に桴を持ち叩いて演奏している。ゴングは１か所で吊っている。前の人物が短剣を持っているので，いずれも兵士と思われる。

Fig. 6　Relief in Baphuon（Flat Gong）

5.2　アンコール・ワット寺院第一回廊

5.2.1　第一回廊西壁面南側浮彫

アンコール・ワットの第一回廊西壁面南側の浮彫を **Fig. 7** から **Fig.10** に示す。描かれている内容は，上述したように，古代インドの大叙事詩マハーバーラタのクライマックスの戦闘場面である。いずれも表面にはコブが描かれていないので，フラット・ゴングと考えられるが，薄浮彫なので，どれほどの厚みがあるかわからない。表面に装飾模様が施されており，また，ゴングを吊る棒とゴングの間が短く，側面に棒を差し込む部分があるようにも見受けられ，銅鼓の可能性もある。ここでは，とりあえず，フラット・ゴングとしておく。

Fig. 7　Flat Gong 1 on south side of west wall

Fig. 8　Flat Gong 2 on south side of west wall

Fig. 9　Flat Gong 3 on south side of west wall

Fig.10　Flat Gong 4 on south side of west wall

いずれもゴングを棒に吊って二人で肩に担ぎ，桴を両手に持った叩き手が別にもう一人いる。ゴングは１か所で吊っており，軍隊の行進に伴う軍楽隊として描かれている。

5.2.2　第一回廊西壁面北側浮彫

Fig.11 に第一回廊西壁面北側に描かれている浮彫を示す。ハヌマンのサル軍団の行進に伴う軍楽隊として描かれており，やはり，いずれもゴングを棒に吊って二人で肩に担ぎ，桴を両手に持った叩き手が別にもう一人いる。ゴングは１か所で吊っている。

Fig.11　Flat Gong on north side of west wall

5.2.3　第一回廊南壁面西側浮彫

Fig.12 に，南壁面西側に描かれている浮彫を示す。やはり，ゴングを棒に吊って二人で肩に担ぎ，桴を両手

Fig.12　Flat Gong on west side of south wall

に持った叩き手が別にもう一人いる。ゴングは1か所で吊っている。いずれも，軍隊の行進に伴う軍楽隊として描かれている。

5.2.4　第一回廊北壁面西側浮彫

Fig.13 から **15** に，北壁面西側に描かれている浮彫を示す。上述したように，ここは1546年から1564年の間にアン・チャン一世が薄肉浮彫を刻ませたところである。やはり，ゴングを棒に吊って二人で肩に担ぎ，桴を両手に持った叩き手が別にもう一人いる。ゴングは1箇所で吊っている。しかしながら，**Fig.14** は，ゴングだけでなく，両面太鼓と一緒に演奏されていることがわかる。また，**Fig.15** では，ゴングと共に半鐘も描かれており，さらに縦笛と一緒に演奏しているところが描かれている。このことから，16世紀中ごろには，軍楽隊で

Fig.13　Flat Gongs on west side of north wall

Fig.14　Flat Gong and Drums on west side of north wall

Fig.15　Flat Gong, Aerophone and Bell on west side of north wall

も合奏するようになり，太鼓などのリズム楽器だけでなく，縦笛などのメロディ楽器も一緒に演奏していたことがわかる。

5.2.5　第一回廊北壁面東側浮彫

Fig16 から **25** に，北壁面東側に描かれている浮彫を示す。

Fig.16 によれば，フラット・ゴングが縦笛や両面太鼓などと一緒に演奏されている。やはり，ゴングを棒に吊って二人で肩に担ぎ，桴を両手に持った叩き手が別にもう一人いる。

Fig.16　Flat Gong, Aerophone and Drum on east side of north wall

Fig.17 には，ゴングが角笛と思われるラッパ状の笛と共に描かれている。表面が摩耗しているので，ゴングはフラット・ゴングかコブ付ゴングか判別できない。やはり，ゴングを棒に吊って二人で肩に担ぎ，桴を片手に持った叩き手が別にもう一人いる。

Fig.17　Gong and Horn on east side of north wall

Fig18 には，コブ付ゴングが両面太鼓と共に描かれている。これによると，ゴングを棒に吊って二人で肩に担いでいるが，桴を持った叩き手がいない。おそらく，後

Fig.18　Bossed Gong and Drum on east side of north wall

Fig.19　Bronze Drum and Horn on east side of north wall

Fig.20　Kong Vong on east side of north wall

Fig.21　Flat Gong on east side of north wall

方の担ぎ手が叩くと思われるが，定かではない。

Fig.19 には，台付ゴングが角笛と共に描かれている。おそらく，銅鼓と思われる。16 世紀中頃には，浮彫の表現手法が進み，フラット・ゴングと区別するために，正面だけでなく側面も一緒に描き，立体的に銅鼓を描いたと思われる。銅鼓を棒に吊って二人で肩に担いでいるが，桴を持った叩き手がいない。おそらく，後方の担ぎ手が叩くと思われるが，桴を持っていないので，定かではない。

Fig.20 にはコン・ウォンが描かれている。楽器の前方にいる者が楽器を持ち，後方にいる者が両手で桴を持ち，演奏している。桴は先が球形になっている。旋律を奏でなければならないので，おそらく，桴の先に布を巻き球形にして音高をはっきりと定めるように工夫していると思われる。

Fig.21 には，表面に詳細な模様があるフラット・ゴングが描かれている。この壁面では，銅鼓は側面が描かれているので，フラット・ゴングと思われる。やはり，ゴングを棒に吊って二人で肩に担ぎ，桴を両手に持った叩き手が別にもう一人いる。

Fig.22 には，大きさの違うコブ付ゴングが２台描かれている。２台のゴングを棒に吊って二人で肩に担ぎ，後ろの担ぎ手が，右手で棒を掴み，左手でゴングを吊るしている縄を掴んでいる。また，先が大きな球形の桴を左手で持っている叩き手がいる。

Fig.23 には，コブ付ゴング，銅鼓，手太鼓，縦笛，

Fig.22　Bossed Gongs on east side of north wall

Fig.23　Bossed Gong, Bronze Drum, Drums, Aerophone and Kong Vong on east side of north wall

Fig.24　String Instrument, Cymbal, Bronze Drum, Flat Gongs, Aerophones and Kong Vong on east side of north wall

Fig.25　Aerophone, Bossed Gong, Drum, Horn and Kong Vong on east side of north wall

両面太鼓，そして，コン・ウォンが描かれている。この浮彫部分は黒沢隆朝の「世界楽器大辞典」におけるゴング属の楽器の章[5)]で紹介されている。なお，この大辞典では，銅鼓を太鼓と紹介している。

Fig24 には，弦楽器，シンバル，大銅鼓，フラット・ゴング２台，縦笛２台，コン・ウォンが描かれている。大銅鼓とフラット・ゴング２台は，棒に吊って４人で肩に担ぎ，桴を両手に持っている叩き手が２名いる。一人は立って大銅鼓を担当し，もう一人は座ってフラット・ゴングを担当している。

Fig.25 には，縦笛，コブ付きゴング，両面太鼓，ほら貝，コン・ウォンが描かれている。やはり，ゴングを棒に吊って二人で肩に担ぎ，桴を右手に持ち，ゴングを左手で抱えている叩き手が別にもう一人いる。

Fig.26　Flat Gong 1 on east side of south wall

5.3　バイヨン寺院

5.3.1　第一回廊

Fig26 から **39** に，第一回廊に描かれているゴングと考えられる浮彫を示す。なお，ゴングと思われるが，はっきりとしないものは取り上げていない。特に北壁面は，途中で描くのをやめたもの，あるいは崩壊しているものが多く，掲載していない。他の楽器は，踊りの伴奏として竪琴などがいくつか描かれているが，ゴングは，

Fig.27　Flat Gong 2 on east side of south wall

Fig.28　Flat Gong 3 on east side of south wall

Fig.29　Flat Gong 4 on west side of south wall

Fig.30　Flat Gong 5 on north side of west wall

Fig.31　Flat Gong 6 on south side of east wall

Fig.32　Flat Gong 7 on south side of east wall

軍隊の行進に伴い士気高揚のために打ち鳴らされる楽器として描かれている。いずれもゴングを棒に吊って二人で肩に担ぎ，**Fig.33** 以外は，すべて桴を両手に持った叩き手が別にもう一人いる。**Fig.33** は，後ろの棒の持ち手が，右手に桴を持っており，別の叩き手はいない。ゴングはいずれも 1 か所で吊っている。また，叩き手の陰にゴング中央が隠れているものが多く，コブの有無がはっきりしないものが多い。しかしながら，Fig.33 以外は，両手で桴を持っているので，アンコール・ワット遺

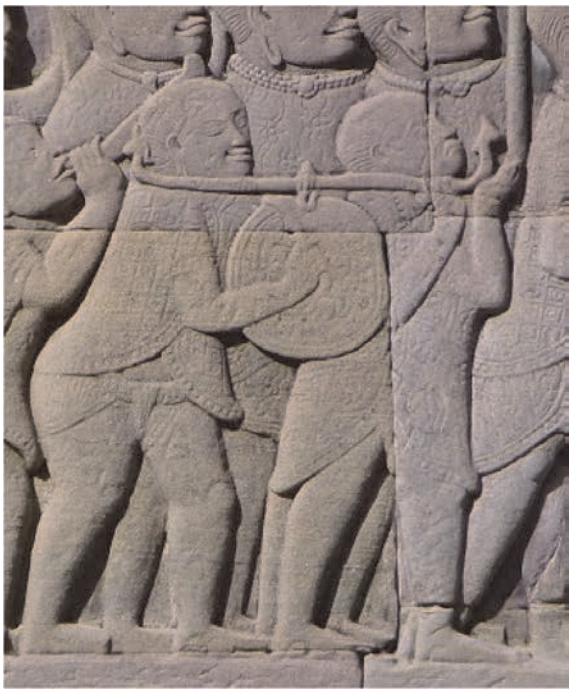

Fig.33 Flat Gong 8 on south side of east wall

Fig.34 Flat Gong 9 on south side of east wall

Fig.35 Flat Gong 10 on south side of east wall

Fig.36 Flat Gong 11 on south side of east wall

Fig. 37 Flat Gong 12 on south side of east wall

Fig. 38 Flat Gong 13 on south side of east wall

Fig.39　Flat Gong 14 on south side of east wall

跡の浮彫を参照すると，描かれているのは，いずれもコブ無のフラット・ゴングと考えられる。

5.3.2　第二回廊

Fig.40 から **44** に，第二回廊に描かれているゴングの浮彫を示す。第一回廊と同様に，ゴングは軍隊の行進に伴い，士気高揚のために打ち鳴らされる楽器として描かれている。

Fig.40　Flat Gong 15 on east side of north wall

Fig.41　Flat Gong 16 on north side of east wall

Fig.42　Flat Gong 17 on south side of east wall

Fig.43　Flat Gong 18 on north side of west wall

Fig.44　Flat Gong 19 on north side of west wall

いずれもゴングを棒に吊って二人で肩に担ぎ，すべて桴を両手に持った叩き手が別にもう一人いる。ゴングはいずれも１か所で吊っている。また，叩き手の陰にゴング中央があり，コブの有無がはっきりしない。しかしながら，第一回廊と同様に，両手に桴を持っているので，アンコール・ワット遺跡の浮彫を参照すると，描かれて

いるのは，いずれもコブ無のフラット・ゴングと考えられる。

6．考察

調査結果から，ゴングについてまとめる。

1．フラット・ゴングは，11 世紀中頃にはすでに存在し，いずれも 13 世紀初頭までは，軍隊の行進に伴い士気高揚のために打ち鳴らされる楽器として，単体で描かれているものが多い。

2．コブ付ゴングの浮彫は，13 世紀初頭まで出現していないが，16 世紀中頃に制作された浮彫に他の旋律を演奏する楽器とともに現れる。

以上のことから，コブ付ゴングは 13 世紀中頃から 16 世紀中頃までの約 300 年間に，カンボジアにおいて使われ始めたものと考えられる。

銅鼓を含めたフラット・ゴングは，非整数倍音がたくさん発音して，音高がはっきりと定まらないので，旋律を演奏する楽器としては不向きである。そのため，音高に関係なく，軍隊の行進で士気高揚のために打ち鳴らされる単体楽器として使われていたと考えられる。また，ゴングにコブが付くと倍音成分が抑えられ，音高が定まりやすい。おそらく，平和な時期が訪れ，文化が豊かになり，音楽もリズム中心だけでなく，旋律を中心とした音楽が発展した。そして旋律を演奏する打楽器も考え出され，それに伴って，コブ付ゴングが生まれ，使われ始めたと考えられる。

この 300 年間のインドシナ半島は，まだ，争いが絶えなかった。1431 年には，アンコール都城は陥落し，1434 年にプノンペン都城が建設される。東南アジアにおいて，この間，比較的平和な時期が続き，文化が発展したところにはインドネシアのジャワ島がある。この時期のジャワ島はマジャパイト王朝であり，その最盛時期は 14 世紀半ばでジャワ・ヒンドゥ文化が成熟する。インドネシアのジャワ島は 8 世紀の前クメール王朝から交流があり，あまり歴史の表舞台には現れないが，常に文化交流は行われていたと考えられる。また，序論で述べた通り，日本のお茶会で使われるコブ付の銅鑼は，安土桃山時代にジャワ島から伝わったとされている。そして，現在のジャワ島ガムランにおけるコブ付ゴングの種類の多さは，コブ付ゴングの発祥がジャワ島であることを想像させる。しかしながら，これらのことは，アンコール遺跡だけの浮彫からだけで述べるのは危険であり，今後，さらに，東南アジア諸国にある遺跡を訪れて，データを収集する必要がある。

7．結論

カンボジアにあるアンコール遺跡，バプーオン寺院，アンコール・ワット寺院およびバイヨン寺院の浮彫に描かれたゴングの調査を行い，11 世紀から 16 世紀までのゴングの変遷について考察した。その結果，コブ付ゴングは 13 世紀中頃から 16 世紀中頃の 300 年間に，旋律音楽の発展とともにカンボジアで使用され始めたことを確認した。

今後，さらに東南アジア諸国にある遺跡を訪れて，データを収集して，青銅打楽器の変遷について調査していきたい。

謝辞

本研究の一部は，JSPS 科研費 JP17 K 02292（基盤研究（C），研究代表者：塩川博義，課題名：音響解析を用いたインドネシア・バリ島のガムランの変遷，平成 29～令和 2 年度）を受けて実施した。

また，現地での調査では，浅野専門学校の小島陽子氏にご協力いただいた。ここに記して深謝する。

参考文献

1）由比邦子：古代ジャワの奏楽図浮彫が暗示するインターロッキング文化圏―インド化の隠れ蓑を被った東南アジア基層文化の自己顕示―，国際文化論集，2014.3.10，p.197

2）黒沢隆朝：図解世界楽器大辞典．雄山閣出版，（1984），p.77

3）石澤良昭：アンコール・王たちの物語　碑文・発掘成果から読み解く，NHK ブックス，（2005）

4）Roger Blench: Musical Instruments of South Asian Origin Depicted on the Reliefs at Angkor, Cambodia, The 11th International Conference of the European Association of Southeast Asian Archaeologists,（2008）, p.240

5）黒沢隆朝：図解世界楽器大辞典．雄山閣出版，（1984），p.71

（H 31．2．7 受理）

Biographical Sketch of the Auther

Shiokawa Hiroyoshi was born in March 31, 1961 in Kanagawa Prefecture, Japan. He obtained his Bachelor's Degree of Engineering in 1983, his Master's Degree of Engineering in 1985 and his Doctoral Degree of Engineering in 1994 from Nihon University. Dr Shiokawa is a professor of department of Architecture and Architectural Engineering, College of Industrial Technology, Nihon University. He is a member of The Acoustical Society of Japan (ASJ), The Society for Research in Asiatic Music (Tôyô Ongaku Gakkai, TOG), and Soundscape Association of Japan (SAJ) and the Architectural Institute of Japan (AIJ),